



生涯学習センターだより

2025. 11. 12(水) 2025 年度第 2 号 (11 月号、通巻 44 号)

発行: 秋田県生涯学習センター

市町村・公民館等職員専門研修を開催しました

本研修は、生涯学習・社会教育関係者、公民館や市民センター等社会教育施設職員に求められる知識や技能等を学ぶことにより、行政職員・専門職員としての資質・力量を高めることを目的としています。今年度は7月23日に第1回研修を、8月27日に第2回研修を、10月1日に第3回研修を行いました。

第1回は「学びのユニバーサルデザイン～みんなでスポーツを楽しもう～」というテーマで研修を実施しました。前半は、当センターの副主幹(兼)学習事業チームリーダー 柏木睦が、「障害のあるなしにかかわらず、誰もが楽しむために必要なこと」と題して講話を行いました。後半は、当センターの職員が講師となり、パラスポーツのひとつである「ポッチャ」と、老若男女問わず気軽なスポーツとして人気が高い「モルック」の体験を行いました。初めて体験する方が多く、みなさんが真剣な姿で競技し、障害のあるなしにかかわらず楽しめる場の提供方法を実践的に学ぶ機会となりました。また、誰もが気軽な競技として長く楽しむには、多くの方がプレーしやすいように、状況に応じて参加者にルールを合わせて実施することが大切であることを確認しました。研修全体を通して、障害のある人もない人も、共に楽しめる場をつくるには物理的な環境整備や、誰もが参加しやすいようなルールの工夫、そして何よりも「本気で受け入れる姿勢」が重要であることを学びました。今回の研修は、講話と体験がセットになっていたため、より具体的に理解したり、想像したりしながら学びを深めることができた研修であり、参加者の感想からも、今後各市町村での具体的な取組が増えていくのではないかと感じました。



第2回研修では、日本赤十字東北看護大学介護福祉短期大学部講師の及川真一氏が、「防災を楽しく学ぼう」と題し講話・演習を行いました。「アウトドア防災のすすめ」と題した講話では、近年県内で頻繁に発生している水害を採り上げ、地域住民が意識と行動を変えて災害に備える必要性があることについてふられました。また、ボランティア側は災害が起きた際、給水所や炊き出し場所に行けない住民もいるという事実を受け止め、被災者に寄り添いながら一人ひとりのニーズに応じた丁寧な支援体制を整えることが大切であると指摘されました。同時に、泥や流木の撤去に、重機を扱える技術系ボランティアを増やしていくことの重要性も訴えられました。各地域では、今後住民が「参加」したくなるような体験型のプログラムを実施し、年齢や障害のあるなしにかかわらず個人の防災スキルを高める必要があることを強調されました。災害時に対応できる力を養うには、マニュアル通りの訓練ではなく、実際に火を起こしてご飯を炊くなど、楽しみながら実践力を身につけることが重要で、地域全体で取り組みながら意識を高めることが望ましいと述べられました。



第3回は「障害者理解に向けて～障害者の生涯学習支援を考える～」というテーマで研修を行いました。始めは、第24回日本ポッチャ選手権大会出場選手である齊藤悠人氏が「誰もが『当たり前』を享受できる社会へ」と題して講話を行いました。齊藤氏は、ポッチャとの出会いや魅力について語るとともに、手伝いや助けを必要としている側の意見を聞くことに配慮してほしいと話されました。そして、当研修が「こころの障壁」を和らげるきっかけとなることに期待を込められました。その後、当センター社会教育主事の佐々木克巳のファシリテートによるワークショップ、「アルクベ・イウベ・キクベ in 山王～車椅子の視点で街歩き体験」を行いました。参加者は2つのグループに分かれ、9つのミッションが書かれたビンゴカードを持って街歩きに出掛けました。そして街歩き終了後は、各グループのメンバーが体験を通して気付いたことを付箋に書き、補足説明しながら意見交換をしました。その中で、「B (Borderless) に気付く体験ができた」「施設利用者の声を聞く機会を設けることが大切だと思った」との意見が出され、参加者にとって収穫の多い体験となりました。最後に佐々木が「今回は、車椅子の視点で活動が進められたが、そのほかの障害のある方の視点や、障害がなくても様々な生きづらさを抱えている方の視点などもある。これからも様々な体験の機会を通して、多様な視点で考えてみてほしい。」と話し、本研修を締めくくりました。



【仙北市】

中央公民館が中心となり、生涯学習センター、市内の特別支援学校、障害者支援施設と連携を図りながら、5月24日に「春のスポーツ、eスポーツ体験教室」、7月5日に「夏の防災体験教室」が開催されました。この取組は4年目となり、活動時には仙北市職員が担う部分が年々多くなるなど、仙北市単独の開催に向けて計画的に進められています。今後も障害者の生涯学習の新しい事業が検討されており、モデルケースと言っている取組となっています。

【八峰町】

7月27日、八峰町教育委員会生涯学習課が企画した「親子でアウトドア防災～いざという時のために備えよう～」に、メインスタッフとして参加してきました。親子1組3人が参加し、「新しい防災のすすめ」をテーマに、スライドによる講話のほか、アルミ飯ごうでの炊飯、簡易テントや段ボールベッドの設営、ポップコーン調理、新聞紙でのスリッパ作りを体験することで、楽しく防災を学ぶことができましたようです。

【北秋田市】

障害のあるなしにかかわらずスポーツを通して多くの人が交流できることを目指して「みんなでいっしょに楽しもう！モルック&ポッチャ」を開催しました。ルールの説明では、目で見て分かるように写真やイラストを使って示したり、実演したりすることで参加者の理解を促しました。また、会場の広さや参加者の動線を考慮してコートの大きさや休憩スペースを配置することで誰もが安全に楽しんでプレーできる場をつくりだすことができました。



北秋田市での交流の様子

【大仙市】

10月10日に「県社会教育主事等研修会・県南社会教育主事協議会研修会」の一研修として、「ポッチャ体験研修」を開催しました。本研修は、障害者の生涯学習推進についてより理解を深めてもらうこと、障害のあるなしにかかわらずポッチャを通じて楽しく交流することを目的として、NPO法人障がい者自立生活センターほっと大仙の利用者・職員と当研修会参加者が一同に会し、当センター職員が講師となり行いました。プレーが始まると、次第に歓声が上がったり、参加者同士声を掛け合ったりする場面が多くなり、和やかなムードで研修を終えることができました。

聴覚障害者の立場で街歩き

「アルクベ・イウベ・キクベ～デフバージョン～」を行いました！

聴覚障害者の立場で街を歩く体験を通して、当事者の日常生活や街の利便性、必要な支援について考え、共生社会への意識を高め合うこと目的として「アルクベ・イウベ・キクベ～デフバージョン～」を、10月26日に開催しました。当センター副主幹(兼)学習事業チームリーダーの柏木睦が進行し、趣旨と街歩きの流れについて説明しました。その後、聴覚支援学校よりお借りした、聴覚障害疑似体験の際に使用するヘッドフォンをつけ、3グループに分かれ街を歩き、「ランチを食べよう」「買い物しよう」などのミッションに取り組みました。街歩き終了後は体験で感じたことを参加者同士で話し合い感じたことを一言にまとめ発表しました。まとめの中では、「(危険が多いので)周りを見ながら行動」「(街の人からの)温かみのある気づかい」など、聴覚障害者の視点で感じたことを共有しました。

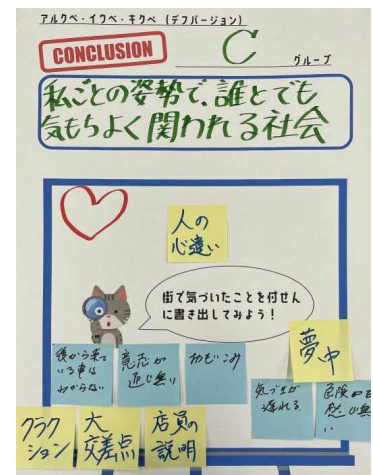
今回の体験を通して、参加者の皆さんは相手の立場で考える大切さを再認識することができた様子でした。



コミュニケーションボードを使って参加者同士での伝え合い



グループ発表



体験のまとめ